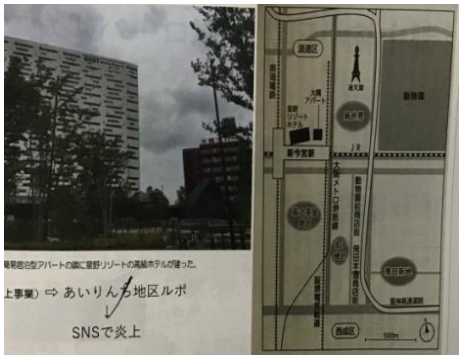
大阪のジェントリフィケーション

18 日の「京都研究会」で、マイケル・リンド著『新しい階級闘争―大都市エリートから民主主義を守る』東洋経済新報社、2022 年 12 月を報告した。リンドによれば、階級闘争は「資本家」対「労働者」から、「大都市エリート」対「土着の国民へ」に変わったと主張する。

報告では本書の概要と問題点を指摘し、2 月 23 日に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された「都市の『公共空間』は誰のものか:日本・欧米の都市から」シンポジウムの矢作弘・龍谷大研究フェロー講演「現代都市とジェントリフィケーション:NY と大阪」を紹介した。

ジェントリフィケーション Gentrification(G)を 20 世紀半ばに発見し、G と呼称したのはイギリスのマルクス研究の都市社会学者 R.グラス。ロンドン東部の労働者地区に中間階級が流入し、地区の改善が始まった。この都市の動態を G と定義した。定義には資本の動態、および労働者階級の排除という階級的な視点があった。

G 研究が活発になり、論争が起きるのは、新自由主義の影響で都市再開発が盛んになる 1970 年代末以降。なぜ G が起きるのかについては、消費(需要)サイド説と生産(供給)サイド説がある。



大阪の G については、新今宮界隈の変容に注目する。簡易宿泊型アパートの隣に星野リゾートの巨大な高級ホテルが建ち、地域との交流を掲げ、「あいりん地区」などに影響を及ぼしつつある。大阪市全体の G について質問したかったが、時間がなくて断念した。

大阪市は梅田や難波など都心部で再開発が進み、超高層ビルやタワ―マンションが建ち並ぶようになった。大阪は「副首都」をスローガンにして、東京後追いの開発ラッシュを続けている。

大阪城に隣接した森之宮地区では新大学キャンパス建設を軸に再開発が計画、大阪湾の人工島・夢洲では万博や IR カジノ、そして国際観光拠点づくりが進められつつある。

大阪市の人口は一時の大幅な減少から、近年は増加に転じてきた。タワ―マンションなどが都心部の北区・中央区・西区・福島区などで急増し、それが人口増をもたらしてきた。西区などは、若い子育て層の流入が目立つようだ。一方、大阪の「下町」といえる都心周辺、周辺部(公営住宅が多い地区)などでは人口減少と高齢化が急速に進行している。生野区では、小中学校の統廃合が強行され、その跡地の活用に注目が集まる。

こうした大阪市全体の G について、大都市の経済社会の変容、政治動向などから、ポピュリズムとも関連づけて調査研究していきたい。

(2023 年 3 月 20 日)